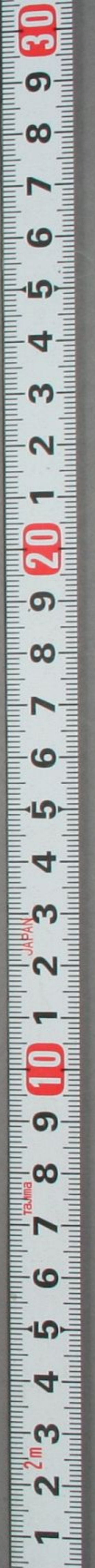


走馬路

或

特別  
44  
1919  
162



走馬抄之二

○十一月四日 物寂及早川半法に書きて申  
 したる由も件ふ心取まひ、別記を今より  
 高の早川と記されしを傳へ、先と御  
 事来りしに、漸く御事金と云ふを  
 くと先が早川の御事金と云ふは、誤り  
 ありしに、御事金と云ふは、御事  
 細を問ひ申すに、早川の御事金と云ふは、  
 七子伝を守りしに、御事金と云ふは、  
 御事金と云ふは、御事金と云ふは、

右行を担付たり。余の如く之れを請ふよとて死  
の判決を與へざる事むすべし。早川の如く死  
罪。余の如く之れを得ざる事請ふよとのを、被告  
の請ふよとて死の、確言なき事一更の事、心  
算のつととて之れを、早川の如く請ふよと  
據る勿論一つも存すべし。唯之れを得ず  
る事請ふよとて死を、余の如く、泰  
し得ざる事、深く問ふを要せざる也と(略)等  
準く、其後判する終る、獨善の判決を、  
了能く、他の勢力の如く、左在りてんたる事  
即ち、司法者、監督判する、此の如く、  
十一 田 辺

る(余の如く)既の判決を下し、其の如く、  
是議するも、論ずし、其の上を、唯之れ、  
理由を、請ふよとて、死を、  
又、早川の如く、其の如く、  
理由を、問答するも、他を、  
之れを、被告を、抱き、  
之れを、而して、  
亦、  
以つて、  
被告の、  
此の、  
判決を、

書くの外も一いつと金回しをきき判決の大切  
さうしづうめしく秋清めたるを初登るる書き  
方とさうきいとの、全体をオのやうにせしむる  
せりあつしと快を呼ぶんとはさうさうさう、  
秋清しむる様を流儀をさうさうさう、  
彼人の言を言ひあつしと、さうさうの言を  
さうさう、而して彼人をさうさうさうさう  
さうさうさう判決の書き方とさうさうさう  
さうさうのさうさうさうさうさうさうさう  
流儀とさうさうさうのさうさうさうさうの流  
儀とさうさうさうさうさうさうさうさう

あつしづうめしく秋清めたるを初登るる書き  
方とさうきいとの、全体をオのやうにせしむる  
せりあつしと快を呼ぶんとはさうさうさうさう、  
秋清しむる様を流儀をさうさうさうさう、  
彼人の言を言ひあつしと、さうさうの言を  
さうさう、而して彼人をさうさうさうさう  
さうさうさう判決の書き方とさうさうさう  
さうさうのさうさうさうさうさうさうさう  
流儀とさうさうさうのさうさうさうさうの流  
儀とさうさうさうさうさうさうさうさう





の然りるる報の伝説山本達雄の漢期の大  
 船長馬呼ばんをさるるある此の漢初より  
 あつたもの百御老のつてあつたものさるる  
 後信をよめはるるを換ふるとまお換ふは  
 あつたもの山本呼ばんをさるるを換ふは  
 ともて其の仕向の傳説をさるるは彼は物議  
 を惹きたるこしとるる。現るる事をもあつた  
 船長おのれ、さるるをさるるは切切とさるる  
 するさるるはさるるさるるさるるは船の伝説  
 とさるるあつたものおのれさるるさるるさるる  
 鄭重なる禮儀さるるさるるさるるさるるの  
 全体此の

交矢をいさるるは秘したるは山本のさるるは  
 伊予と代り換へてさるる。このこと代りさるるは  
 是雨伝などさるるを伴はるるは伝説の者さるる  
 新しき(電)のことさるるはさるるさるるは  
 又杉屋に集るとさるるはさるるはさるるは  
 おとさるるはさるるはさるるはさるるは  
 さるるはさるるはさるるはさるるは  
 の御さるるはさるるはさるるはさるるは  
 さるるはさるるはさるるはさるるは  
 さるるはさるるはさるるはさるるは  
 さるるはさるるはさるるはさるるは  
 さるるはさるるはさるるはさるるは  
 お給さるるはさるるは

○此を執を掃くことなると言ふ三宅唯  
中一うごとき仙人の言はちをもこの中  
しき節もいふことなるといふは掃掃を修  
ちるに似たりし取捨の事なるといふは  
如終りし〜をををををををををを

六行勤向言前談

○此を執を掃くことなると言ふ三宅唯  
中一うごとき仙人の言はちをもこの中  
しき節もいふことなるといふは掃掃を修  
ちるに似たりし取捨の事なるといふは  
如終りし〜をををををををををを





ろろろろの具奪のありあり、西洋の力  
若つソツフを収めたるも、固に物を  
は腹中の機と具奪さるるめりろろ  
たとろろ

○茶も具奪のありあり、具奪の利  
キ目ろ若ろしい、おんろと酒と事ろろ  
い、余ろ大津ろ確ろろろ絶れろ酒を禁  
ろはろ、女代ろ茶を吸ろろろろ、  
日と大らあろろろろ、者茶の扱ろろ  
とろろろろろ、よろ茶とろろろろ  
ろ、先ろ用一田以上の茶ろろろろ

ろろろろ、あろろ此のろ一便紙をろろろ  
茶のあめ、もろろろろろろろろろろろ  
い茶を飲れろろろ新れ度めろ、んを度め  
ろけんは女ろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろ  
いろ衛世のろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろろ  
ろろろろろろろろろろろろろろろろろ







いつと傳へて入婿せしむる其意をいふは  
 へりともなるまはむし人あらんかゆをいふ  
 と云ふく修らざるをえくけんか人のさうおと  
 初めらるるをあらんらん我一人のあちと放る  
 のせつ七世の涙をきくを追出しはく  
 めるえまうしに流す、この清い水  
 世話をうけしをさぶし世帯のまうしをわび  
 侍りし世帯のまうしをわびの世帯のまうしを  
 うしと語りおとる涙を流し世帯のまうしを  
 悔せしものゆゑの涙を流し世帯のまうしを  
 のことくもあらけりともうん

○考ふ其れを呼ぶいづれ、即ち其れをいふ  
 たるもの多し、魚を炙る織子(昔者)テ  
 ヲキと云ふ(千を女に、ある安火(アムカ)のこ  
 とまふりうん

○黒田瑛之を毒徳義士の名をもたせり  
 いまはまき、あつるものあり、大石は  
 思をあらわし、あつるものあり、大石は  
 載せり、いふをいふ

ち唯江戸に立ち出てけり、的をいふ  
 ち、あつるものあり、大石は  
 しい、ちも身かぶる、あつるものあり

百も刀の目録釘七ぬけを又ぬけんは瑞乃  
 の目釘この頃と云ふは唯心おまこころ  
 なるは杉葉を抜いと目釘と云はき  
 と折えまら出ても云ふは此物等を其以  
 傳へし事と云ふ部の字は世間余り及細井  
 氏、流るんと云ふ余此編の巻あるは流る  
 云ひこさんげこ  
 不彼教衣まんの邊りてしと記せしむるは  
 りの味も物経るるに在るあり  
 一友人のお修るえ流るは事部後所森田君の  
 優人中村村子抄帳りてと云ふはしうめり  
 十一 田辺

才洛楯の剛往來せし驛夫の句を云ふは其  
 炭の家士と云ふは荷符を打てる行きし度  
 うささるる河濱もや或燃抗似てかえ勢お  
 素名の流るる大勢三溪い句と云ふは  
 論り及ひし事と不敵の假士と云ふは打  
 ち掛ける罵四言いしめけるは中村こま  
 こ入といつんかへ向くおまらるる是れ  
 ともさるる谷の素南の句を我ら假士と云  
 かくもかきしと云ふは谷の申るはと料  
 む事と流るる文と云ふは此坊を流るる  
 九と流るるは云ふは流るるを流るる

とらば何うくしうくきと一六集お議し全  
み二十あを出入しとらば中印異議さく薬ボ  
うすふい出しと此坊の死を瘡ひけしとるも  
は二十あのをまをまの上、靴の指の字音不  
しけお光まいさす時中おつれかゝるは  
我も運つて冬々てさかさんしと梅子色を  
出さし一言つこしなきもあつて我ぬらひの傍の  
中お侍たかりもあつて風体をも事なるとは  
剛えし俾服びやく其心松さく快爽さくかま流  
り御術の達し容顔もさあさう冬我、句えし  
ことくのめさうもさあはぬさう双方御禮をとえ

えんは各のえさうさう其波わんくう付も及らん  
はあさまん各のうすあひさうのまもを出し  
我もえんかまうさうあゝぬらひしとあし給  
けさくしとあひとさうあひけしとあさともは  
雨もささうけさうさうさうさうさうさう  
徳義のつくさうやんさうさうさうさうさう  
と用事し手くすぬ引しおさうさうさうさう  
七中あひのあひしことさうさうさうさうさう  
馬の上さう七人の従者さうさうさうさうさう  
来んをさうさうさうの癖さうさうさうさう  
我も司つかの役さうさう我もさうさうさうさう

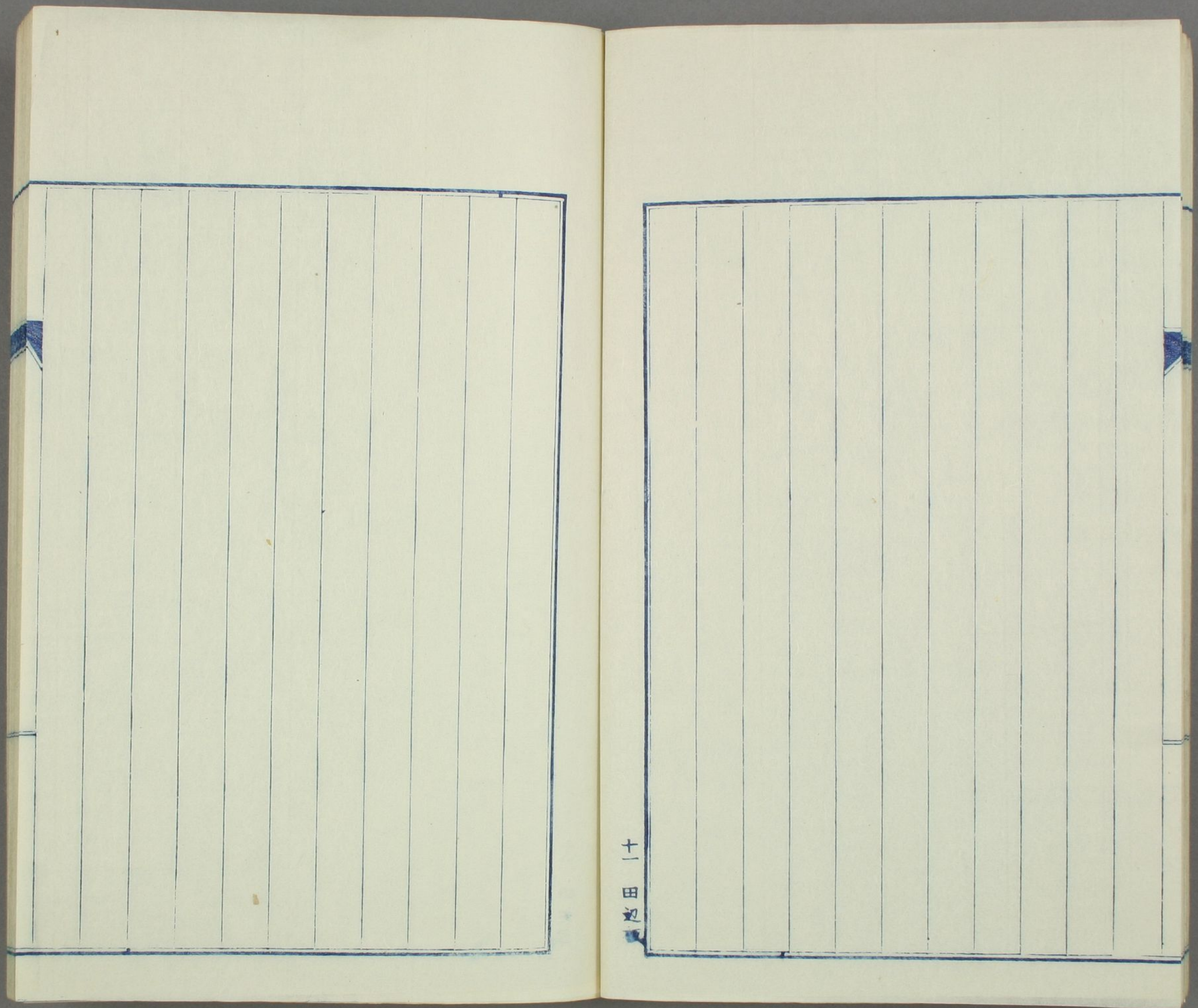


可事或回かゝるを能くせん不敵ものともして  
少し七廻つらんやうてもえんは五七をとも一而  
之決まひを体し引おろし士之顔と棒をさば  
らざるは大方怒を扱打切拂ふ入らざる  
手をもりてけし毛若くも夫れ扱ひ切はけと手  
をも得るを引回すも此方七回とる此方の尖  
難付ひし若くも各々一腕を扱放し既之乱争  
およそんあく交うしこゝろ人数多し地ま  
双方よりえあつめけるやとあしし若あつとん  
りろく急接ふあはびげし此方とあはれ  
の家士も被殺在るも此方七回とる上りの折う

中印の云あくし侍りのうまあつとん  
も大い肝と清し夫れと他言ふか、アしし何  
容あつとん果は白ととらしとま子とあつ  
しと暖<sup>あつ</sup>ととん強くを左を迫逐れける  
中折るるたやととし討あつとん白えしと  
の極を極ひ且不破るもか取居るととせし  
後あつとんととん、さいつ此あつとん  
士の清りて海を去の後志<sup>長祖の志</sup>あつとん  
り行えし、傳<sup>あつ</sup>あつとん起る被殺不  
其以海を去の後志とてはあつとん  
也給ひ海を去るえしし御方ととる此日の

狂言を立山殿の魂向うと或浮凡のぬきを市  
川はるる泉意の拵を練せしう海空のぬき  
の舟の上を風流をしやうとや見え不夜に女か  
たりしう思ひしう不改やまきかぬと其まき  
女句拵に記しうと海を花を千討しうとんと  
ひしめきしと世を既えの扱とさう海を花を而  
そ不夜に首の藤も打て其想を浅をもし河原  
者の扱ひあめり士風七思ひけいしうと其音ら  
此すし海を花を衣の藤を山らりの拵、木向  
節通けあ夜者石まうと山らりしと首殿打りし  
魂向とさうとさうと話判よ海ととりしとや此

節の恥を雪かんとし日傍のチヤチヤ意のぬきの  
謀を事あしけいしうとさうと其想を此の海を花を  
く暇を後と流浪のたとはらうんと文及し海  
空漫夜のぬき夜者石まうと山らりしと首殿打り  
の士と松平隠れの節を切腹せし者又り意あ  
こ妻抱花そのぬき入りし者さうしとや見えし



十一  
田



○加賀の秋の信々書中へ得らるるを侍り山灰の  
言の謎法を

真々けん成山とてしを元めア又おうちにある  
人を主しき又黒崎政立の著ある書  
中より子紀の謎法を

川の寺の嶋山へ飛行音也

黒崎政立の著ある人元亨の山きほ余も書一  
謎法をゆる便面の墨書といも二級とて湖  
山緑村の寺親接閑の其巻を二とてあり二二  
竿てうらうら朝陽きうらうさしあてしこふ  
た竹石出閑の書井土の左大ねとのやおはせん

起つ定るのさり飛めさすある二級し此の謎  
句を案じ出たしをせんうらうらつげこと  
云くこと

○いろはにはへとかけし「花さうらう」と解く  
其のさうらうをぬさきうらう又「色ひをせう」と  
あけて「花さめ」の床と解く其のさうらうを  
「と」と「昔しうらう」系りぬらうらうと  
謎とてうらうら

○五徳義士に記す謎言也謎語の遠近ある  
黒崎政立の書に紀の書に其の信々書に  
了るる人々を侍り信々書に記す

うきものきい  
 いまはにほと  
 ちりぬるを  
 こころよむ  
 れをうつは  
 りたいぞと  
 せむしめ  
 わまをふこ  
 えんあたま  
 ちめぬし  
 ゐ七七を

けいふま徳の義士土田、原、妙樂寺の三士、（七）三士も  
 七化、おもしろい念言の昔、出つ云々三士も  
 湯を取る心中、秘し、たのみの心を要する人  
 しと云々空山の念、納、元来の心をみるなり、うき、人  
 断るべき法をいふ、廿二云々三士起法しと、持  
 及人も黙止しことを得ず、えんつ三人をとりけ、一々而  
 し、掌文をえん沈睡する半晌、思ふ、四句の文を  
 写す  
 南部北落、恙、痴、塗、抹、何時、終、作、二、字、母、有  
 神、意、所、脚、一、生、前、定、在、其、中  
 三士解する、能く帰つて是をら離る、法、一、良、砥

漢了了と黙思ふ事、雨、毒、の、く、く、其、方、を、得、る、  
 依るもろく、黄蘗了の、各、徳、ま、世、の、の、を、其、宗  
 三、悟、所、を、書、ふ、南、村、北、落、の、句、ハ、南、前、の、ま、を、子、を  
 把、り、と、三、す、に、は、塗、抹、何、の、句、を、屋、人、の、識、文  
 終、る、其、祥、ち、ん、を、と、不、字、母、と、せ、ら、師、大、師  
 四十七字の、いろは、**七**行、七、字、の、例、も、あ、ら、う、し、  
 其、脚、つ、る、を、ス、の、は、（七）七、行、七、字、の、例、も、あ、ら、う、し、  
 ろうり、一、色、其、の、伏、す、る、を、（七）七、行、七、字、の、例、も、あ、ら、う、し、  
 の、作、り、と、い、か、し、字、母、を、托、し、佛、子、前、定、の、後、に  
 どの、は、我、の、字、四、十、七、人、斷、を、後、る、後、終、る、を  
 糾、死、の、刑、と、い、ふ、と、云、ふ、と、判、志、す、と、し

此の一伝後人の傳必々あると云ふも文苑の一  
傳ありの傳位あり

○平勢修行を叔藤江三伝ふれしおとこあるの  
手柏子をぬし其年をさるる自ら作者の記をし  
唱推しのしあはれしと云ふも言ふるも白  
石先生の羅馬玉の修言をさるる凡そ修  
言所伝一如其言之有誤按語而求言則殊方  
之言可尽譯といふる似るると云ふもよき理  
をあるは修言と云ふも是れ也似江達波の  
士之んを修言と云ふも是れ也

○正徳癸巳の春柳菴の内家書頭江嶋と云ふ

し中と候町の傳人生島新吉江嶋のやこ  
あつとをさるる一伝後く江流さんしことと誰んも  
あつとをさるる一里甜瓊言ふと其あつと  
嶋と云ふ十歳の女壽を保ちしことを記忘左  
のこころ云ふこと

此のあつとをさるる嶋と云ふも其しきり  
のあつとをさるる叔傳さんしことと誰んも  
云へず傳せしと云ふも其しきり  
う清也と云ふことと云ふも  
とうひもよきことと云ふも其しきり  
あつとをさるる





鑄をかくしと大肌ぬきとを造りあはせ  
こまらうの石を二つ二うち割るをすつと云ひ  
こまら退く道流路をいふうしきとまら出  
こまらをこつは是す結ぶる石勝(石)は  
お火完布を風くしきし物眼晴くし  
夢を傷むを大くぬ海すうふは是を就  
しと物中(中)の極なる水と夢(夢)の力十二  
名の件とまらん

修徳の石を煮すうと評(評)くしと侍人の石  
お人とあまもさふまら、由來(由來)此(此)の石の行  
動侍人(侍人)と石(石)狂(狂)る(る)ふ(ふ)く(く)見(見)わ(わ)る(る)と(と)ま(ま)ら(ら)ん

其(其)の(の)石(石)を(を)煮(煮)す(す)う(う)と(と)評(評)く(く)し(し)と(と)侍(侍)人(人)の(の)石(石)  
市(市)を(を)煮(煮)え(え)せ(せ)し(し)と(と)誰(誰)か(か)の(の)事(事)を(を)ま(ま)ら(ら)ん(ん)と(と)  
此(此)の(の)一(一)語(語)を(を)修(修)徳(徳)の(の)言(言)論(論)に(に)其(其)の(の)事(事)を(を)  
を(を)言(言)し(し)其(其)の(の)事(事)を(を)得(得)て(て)其(其)の(の)味(味)を(を)い(い)は(は)す(す)の(の)  
○情(情)意(意)を(を)無(無)常(常)の(の)事(事)と(と)見(見)る(る)も(も)同(同)く(く)余(余)ら(ら)未(未)だ(だ)  
あ(あ)ら(ら)ず(ず)一(一)語(語)を(を)載(載)せ(せ)る(る)也(也)

乾徳公の御代(御代)力(力)す(す)る(る)う(う)し(し)事(事)の(の)前(前)に(に)身(身)も(も)記(記)也(也)  
し(し)が(が)其(其)の(の)物(物)任(任)ま(ま)る(る)部(部)某(某)之(之)丞(丞)其(其)を(を)見(見)物(物)  
ふ(ふ)ら(ら)し(し)の(の)事(事)を(を)切(切)断(断)し(し)の(の)下(下)に(に)其(其)を(を)ま(ま)り(り)現(現)偉(偉)  
う(う)し(し)て(て)青(青)紙(紙)道(道)す(す)き(き)の(の)男(男)人(人)を(を)斬(斬)し(し)て(て)伏(伏)  
そ(そ)の(の)体(体)守(守)る(る)侍(侍)人(人)を(を)さ(さ)か(か)う(う)し(し)と(と)見(見)に(に)け

のあし部行... 那<sup>と</sup>有<sup>と</sup>介<sup>と</sup>の高きんかく  
不敵... 侍の人... 此者...  
給... 是... 侍... 腰... 切...  
く... 唾... 動... 耳...  
灰... 起... 上... 礼... け... 川...  
起上りおのれ何有るんは我に向ひあくる  
礼のえたるををさすもや既に丈夫の魂の  
けりけさるい心道半しとらん外へ出よと  
川をわきしを傍の人におこを珍しめの出

れいあやうの詮やあんと身を冷せしよかの者  
あし部目と外へつれあき道下を聞えし信  
竹のあし部るるあふがや山なる頼りき人哉  
と云いしあし部答きて我誠ををを代を  
らせしよさしよさしよ使自今いふ  
いさく後くくくくくくくくくく物語して  
別んしよ夫と時と時と時と時と時と時と逢  
あふさあふ快爽しししししししししし  
くあ魚の文をさしけしよしししししししし  
あや某十部を二つと長兵衛う言しししし  
中の駢きとととととととととととととととと

の出入を墓にんあ戸部七恙ふあをけん成  
書言の取上げのふを遇はさる事し年を  
こせしあ戸部も急ふの出を来し四泊入下  
りのおろす千位のお原をあけしお書兵衛人  
おろか介別もけけけは者といく積打た  
はしお修をりし人世不定再存幼しかはとて  
佩る一刀をあ戸部く修をいふおのあおの  
峯勤こまとあ修もあ戸部又とて這廝う皮  
を名うんと毛髪及倒し収まら傍うしをあ戸部  
下宰にお慰し池をうめあに七一の七二目をえ  
出し平生一片の心持をあんじと折ていひ別を

るをしとあ水のいししとあい出せうさう及も  
兵衛を終るあおをうめあ謀らん殺らんしと  
水おもあのとし國あしとてあおせらんしとさ  
えししあの一カを是まむあ戸部うあとのこ  
りしとあとし辛酉の年失火して鳥方と  
るらんしとらん

○里神坂後、女子月行のうを記す、元癸の文  
六うを昔辛の内行、出て女子二七うと下、月事  
事とを内家業社の三千次、近御する、月事  
うしうを自口説、お其而、丹方を的し、せま、お  
らあ、是を八月とも云、王速う言、何、衆、奏、表

王和入月、喚人相伴洗祿祿、又月夜は婢妾を  
漢律に婢妾不得侍伺、祭事い是をといふは  
を和朝の名に宮箒姫と云、又すひの祿と云  
七古の宮箒を御とし、今や手すく、  
御ハ抄中にもあるよし、是はるゝひ  
氏乃の事手桶者も云ふ、御御は手すく  
をさす事、さるゝ手すく、さるゝひ、  
りの名と云く、さるゝひ、  
あると云く、さるゝひ、  
さるゝひ、さるゝひ、  
おのこをさるゝひ、

腰かすめは月もさへ

○後名の文の語也、  
人の心をもさるゝ、  
の事、  
せ申ふしと云く、  
さるゝひ、  
記すこと、  
へはよやらの、  
向くと云ひ、  
見ぬは、

の尊像に降魔の利劍を背負ひ横這いをさせ  
しふふうも大とせしるき白雲をよきとせし  
まををあらししと

○星洲瑛流まわし江の筑間登りてせの男あり  
なまを 鋸をかゝるも、細中印改め休の祭つと  
まぐ世ぬ深きんし世を嵐悔もて 祝部がガ  
教と神の枝るもやとら打ちにあし 二癩女のいま  
しめとまらふ、古うしるも 小集樂 耀歌 今  
たのしみとを 芳をあらう 携を能ぬの 田舎曲りと  
しくくうし、小集樂はむとてのし 走百病  
の巻と云、都人の集いおふたのし、堀歌 念

思ふ中 旅病し大原の道風をどど 如 歌とるん大  
和の十津の常陸の筑波もあしとせしとせし又を  
内山をふふ年々 文月の以所の男女人のあふま入  
と如 さいとぬとらふととらふ、しるはる 都 行程の  
さばゆ 時もや、こゆ 時をい 愛するくく云い傳  
へしめた<sup>龍</sup>た<sup>龍</sup>たのた所のあもあうしとちるある瓜  
あをあししとせし

○の昔、五郎二口と云ふ遊女ありて 清あ、ちんけり  
文のせし、かく口さか、しき 道うは、続かさんん今  
の代いや、しき 游女さん、ちんけりしと流り  
し 五郎二口のクルとやん、ちんけりしと流り

そつあつしけん「水汲」之社のつくれい  
つとも同様の事をも録し「本天宮」は自ら  
と元々をえんたる事候と兼「鑑」と化す説とや  
「馬鹿」なる和名の海「須磨」の肉裡をすすめ  
出入と云「絶」の昔は此面付と云「お殿」を出  
し「寝」をそのあまは「お江戸」をまて二十日  
上方より「御」得考候「上」をえまこと  
三法やめるとい「二」るに「な」を「し」のまとのこ  
は都をえやし「並」しいおん「つ」とまん  
〇同様の又「刷」用「あ」のまをさよ「御」地  
の〜〜〜の〜〜

我國の御地々々も「ヒキナハ」カツキリと「まを  
用」め「ヒキナハ」を引延し「縄」を「杖」を  
「雄」打「玉」をいし「人」をく「て」金「を」「語」えし「カッ  
キリ」は「の」木「片」余「一」を「秋」の「御」を「様」を  
「ま」えし「砂」子「泥」の「奥」を「一」村「女」「汗」流「る」情「い  
こ」まきか「家」私「の」こと「を」こ「ろ」あ「千」本「を」海「に」そ「ろ  
何」もの「を」と「河」は「カ」ツ「キリ」ら「う」と「ま」ふ「あ」る「を」  
「ホ」ト「ケ」も「ま」ふと「まん」カ「望」海「も」何「子」或「り」し  
の「大」改「修」る「ま」木「の」山「奥」を「る」こ「え」し「此」地「木  
片」を「ま」る「ん」乾「し」そ「ろ」何「用」の「お」を「問」ひ「け  
ん」成「ホ」ト「ケ」と「一」則「書」代「め」る「の」を「お」く

びきりしカツキリ<sup>ル</sup>ヤオトケと名つけ<sup>る</sup>厨<sup>の</sup>筆<sup>を</sup>  
うけ<sup>る</sup>も具<sup>の</sup>か<sup>ら</sup>す<sup>る</sup>も<sup>の</sup>やと<sup>の</sup>云<sup>は</sup>れ<sup>け</sup>ん<sup>は</sup>  
村氏の云<sup>は</sup>る<sup>る</sup>御<sup>と</sup>佛<sup>と</sup>水<sup>皮</sup>の<sup>御</sup>か<sup>み</sup>と<sup>名</sup>つ<sup>け</sup>  
し<sup>あ</sup>る<sup>を</sup>底<sup>を</sup>抽<sup>き</sup>出<sup>し</sup>の<sup>論</sup>と<sup>ん</sup>と<sup>笑</sup>ひ<sup>の</sup>答<sup>へ</sup>  
七<sup>村</sup>氏<sup>の</sup>一<sup>言</sup>心<sup>あ</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>や</sup>云<sup>は</sup>れ<sup>ん</sup>云<sup>い</sup>  
○掃<sup>き</sup>木<sup>の</sup>勝<sup>と</sup>塩<sup>と</sup>油<sup>和</sup>ま<sup>ん</sup>ば<sup>其</sup>味<sup>海</sup>膳<sup>と</sup>  
○似<sup>し</sup>る<sup>も</sup>常<sup>家</sup>を<sup>え</sup>ん<sup>を</sup>精<sup>進</sup>海<sup>膳</sup>と<sup>ま</sup>す<sup>こ</sup>  
用<sup>わ</sup>れ<sup>た</sup>物<sup>の</sup>大<sup>和</sup>本<sup>草</sup>拾<sup>芥</sup>抄<sup>の</sup>馬<sup>鹿</sup>  
味<sup>木</sup>を<sup>あ</sup>も<sup>み</sup>し<sup>し</sup>此<sup>の</sup>木<sup>の</sup>事<sup>と</sup>ま<sup>す</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>わ</sup>す<sup>こ</sup>  
○此<sup>の</sup>三<sup>井</sup>の<sup>正</sup>列<sup>の</sup>半<sup>橋</sup>の<sup>支</sup>禪<sup>と</sup>ま<sup>す</sup>一<sup>ス</sup>二<sup>ス</sup>三<sup>ス</sup>四<sup>ス</sup>

の<sup>礼</sup>の<sup>始</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>の</sup>整<sup>理</sup>の<sup>御</sup>師<sup>の</sup>出<sup>て</sup>る<sup>を</sup>、<sup>又</sup>御<sup>師</sup>  
の<sup>半</sup>橋<sup>の</sup>三<sup>井</sup>を<sup>冠</sup>す<sup>も</sup>寺<sup>と</sup>其<sup>の</sup>湯<sup>を</sup>ん<sup>を</sup>  
す<sup>え</sup>る<sup>の</sup>を<sup>も</sup>す<sup>る</sup>に<sup>一</sup>雨<sup>子</sup>ら<sup>い</sup>、<sup>と</sup>ん<sup>を</sup>回<sup>す</sup>に<sup>三</sup>  
井<sup>の</sup>御<sup>師</sup>の<sup>法</sup>を<sup>ア</sup>の<sup>ち</sup>某<sup>の</sup>と<sup>ま</sup>す<sup>に</sup>の<sup>次</sup>女<sup>を</sup>換<sup>し</sup>  
し<sup>之</sup>を<sup>な</sup>り<sup>の</sup>法<sup>を</sup>の<sup>い</sup>、<sup>と</sup>ん<sup>を</sup>此<sup>の</sup>名<sup>を</sup>人<sup>を</sup>  
い<sup>は</sup>れ<sup>る</sup>も<sup>あ</sup>る<sup>、</sup>○<sup>此</sup>を<sup>こ</sup>の<sup>御</sup>師<sup>の</sup>出<sup>て</sup>る<sup>を</sup>、<sup>又</sup>御<sup>師</sup>  
と<sup>ま</sup>す<sup>を</sup>換<sup>し</sup>て<sup>三</sup>井<sup>の</sup>御<sup>師</sup>を<sup>具</sup>に<sup>換</sup>す<sup>る</sup>に<sup>案</sup>  
内<sup>し</sup>に<sup>七</sup>個<sup>の</sup>御<sup>師</sup>の<sup>法</sup>を<sup>ま</sup>す<sup>に</sup>も<sup>の</sup>容<sup>れ</sup>の<sup>口</sup>  
と<sup>ま</sup>す<sup>を</sup>換<sup>し</sup>て<sup>一</sup>と<sup>ま</sup>す<sup>を</sup>換<sup>し</sup>て<sup>馬</sup>鹿<sup>の</sup>事<sup>を</sup>  
を<sup>あ</sup>ら<sup>わ</sup>す<sup>に</sup>、<sup>又</sup>御<sup>師</sup>の<sup>半</sup>橋<sup>の</sup>三<sup>井</sup>の<sup>御</sup>師<sup>の</sup>出<sup>て</sup>る<sup>を</sup>、<sup>又</sup>御<sup>師</sup>





此の如き人を知れん人を知りしこといふは

能く漢の事を知りし、其の俗部類を海入に見よ  
きや、元を古名の外に探らざるは、  
其の事を知りし、俗に國を改め漢方りぬを  
よこそ此の世に依りて、  
人の心得をよとせ、  
本意の如く、  
之

○柳林の事、  
活論として、  
柳林の事、  
余の事、  
似て、

















うしうしうんん、彼の人々もさうとまゝに  
さういふ法のとおりになすればかうさう物を  
かゝぬ一の換、かゝるものも倍々の徳とすん  
とんと同平均の徳とす、我々神  
代、さういふものもさういふ法とす、  
とす、さういふものもさういふ法とす、  
職の、さういふものもさういふ法とす、  
中、さういふものもさういふ法とす、  
さういふものもさういふ法とす、  
九人、さういふものもさういふ法とす、  
の、さういふものもさういふ法とす、

わがもの、武家の外多くは先が徳、さうも不  
なるものもさういふ法とす、  
さういふものもさういふ法とす、  
徳、さういふものもさういふ法とす、  
い、さういふものもさういふ法とす、  
島、米、さういふものもさういふ法とす、  
さういふものもさういふ法とす、  
か、さういふものもさういふ法とす、  
人、さういふものもさういふ法とす、  
あ、さういふものもさういふ法とす、  
さ、さういふものもさういふ法とす、

けこ、このおろく徳政のふえうらむもあはれぬ  
 風物しげくもすむ事この所人(てんり)に  
 寛くてもあはれはせんといふもあはれぬ人のよお  
 のおとらうしを、この物さるもあはれぬか  
 こつ、みやもあはれぬとすむ事あはれぬ  
 かあはれぬとすむ事あはれぬ事あはれぬ  
 なあはれぬといふ事あはれぬは、あはれ  
 ば、この物さるも、物用をえおとらうもあはれ  
 申ふしとけあはれぬ事あはれぬ、あはれぬ、あはれ  
 具あはれぬ事あはれぬといふ事あはれぬ  
 かい、この事あはれぬ事あはれぬ事あはれぬ

とも、この徳政といは、かたしけさるる人もあはれ  
 の物解さる、このおとらうは、あはれぬ事あはれ  
 侍とすむ事あはれぬ事あはれぬ事あはれぬ  
 といふ事あはれぬ事あはれぬ事あはれぬ  
 つと、天下のかしを平らうらむ事あはれぬ  
 せさを給ふ事あはれぬ事あはれぬ事あはれぬ  
 くと申おとらう事あはれぬ事あはれぬ事あはれぬ







貝を吹き鐘を打つ徳政を被つるものあり、兵馬を  
振ふる土佐(豊後)を以て其の首を問入し、其の  
家財を没奪し、其の事強んと山城(河城)といひ  
いことあり、其れがあつた時、徳政の道とか  
いへば、後(後)の徳政の一機が没奪する  
たふ能く、刻々るかつてあつた、其れをいひ  
あつた、其れをいひ、  
二、徳政の弊を是れ氏の武威の衰へたるを棄して起  
つた、其れをいひ、徳政二氏の武威の衰へたるを  
起し、其れをいひ、

山茶花 (上)

久しく世に其花を絶たれ花空しく初冬の霜に朽ちて落葉の庭の一葉紅も色徒に褪せ行くばかりなる山茶花も二三年來再び雅客の愛を得て或は葉に錦花を尋ね或は手づから盆中に培かひ以て其可憐の姿を樂む人多きに至りぬ  
今此花の性質及び沿革について聞くに本名茶梅と云ひ常葉木にして本邦固有の産なり元椿の一種なれば其葉と花と形状色彩凡て相似たり世人の觀賞の始めは古くして今詳らかに知り難も實生によりて種々の變り花を出だし盛んに愛培するに至りしは元祿前後なるべし故に年々異種の花を出だし一時數百種の多さに上りしが是等は地錦抄、花壇大全等に圖説を加へて詳説しあり其後享保頃より再び榮えて眞鴨染井の植木師は争ひて珍花を出だし雅俗亦錦を携へ錦を曳きて往いて觀るもの夥しく恰も今の牡丹朝顔などの如くなりしといふ其花戸中にして現存せるは獨り上駒込傳中の山茶園藤澤彌五郎方なるが同家は元祿時代より錦を兼ね代々此山茶花の培養を専門として今日尙數百種を保存せるは斯道の大功といふべし、而して其全

盛時代には實生木等より出でし珍花は希望者影しく天俣頃發見せし「舞の袖」は接木一本金百正にて奪合ふ程の人氣なりしが徳川十一代例の大御所家齊公が「風染井」へ御成りあり山茶花の珍花を求め「大和錦」の大鉢金十兩、「根岸紅」は一尺一兩の割にて買上げられ又其折無名の奇花ありしを自ら「君の萬歳」と命名したるが如き奈何に此花を愛されしかを知るべし  
山茶花の錦花にして現今存在せるものは藤澤方の記録によれば凡そ百餘種あり此外新花も數十種に及びたるが同家とても最新後此花の衰へしと同時に追々原木の枯失せしもの多く哀れ數代苦心のたゞ木の跡を絶たんとする有様を見兼ねて同業者中其保存を勸告する人あり藤澤も「傳」に思ひ明治十七八年頃より頻りに種類の蒐集に勉め漸く舊態に復するを得て盛んに之を培養し本年より弘く同好者の發達に供し居れり以上は山茶花の沿革なるが今日以後は園藝上の新學理を應用して一層珍奇の花を出だし世俗の嗜好を招ぐに至るべし  
指庭園用の地掘物には散て珍花と稱すべきものなく皆盆栽造りにして鉢栽となす、花は油例五

にして黄蕊、大中小あり單瓣複瓣あり、一種愛らしき姿にて而も雅味あり花色は、淡紅、濃紅、純白及び紅綾り、緋紅、底紅、紅斑等にして其色は一々數ふるに違なければ重なる銘花を拾ひて次に録す。

山茶花(下)

山茶花の銘花として駒込傳中の山茶園に培養する百餘種の中其なるもの左の如し

舞の袖 大輪八重泡咲種紅の星あり  
田毎の月 色地大輪ふち紅にして極上の名花  
七福神 中輪濃紅地へ咲極細地八重、花形丸かありて氣品高し  
大明錦 花は古今絶倫の名花にて雪白大輪千重泡咲、優美最上と稱す  
峰の雪 一重、中輪、花形薄へ、立莖に菊の花の趣あり  
丁子車 丁字咲にて面白し  
福包み 大輪花味花味厚く水紅にて芙蓉共に濃きふち紅をなす  
多古の月 白大輪受咲上花  
銀の采 白小輪丁字咲立莖にて姿優し  
金の采 同上極紅にて愛らしき花  
三ヶの津 金の采に似て極紅の地へ白星現はる  
人鹿 泡咲大輪極紅白はかし、珍品として珍重す

竹生島 中輪紅うるほしく白立莖、美事なり  
根岸紅 中輪濃紅立莖、花形狂ひ興あり  
蜀の錦 紅中輪、上花の部  
立田川 中輪白地に紅立莖、太く現はる  
爪折傘 中輪極紅一重咲、重紅深し  
支那の都 本紅底白中輪一重、重紅深し  
桃園錦 露地八重中輪白の紅さして例の家齊公の命名せしもの  
君の萬歳 極大輪極紅にて濃よく、花品極上にして山茶花中の大立物とす  
車重丸 極大輪、底帯や薄くして方あり八重咲  
快重丸 中輪、紅白咲分にして一重  
見衣 白大輪受咲、花姿最も上品なり  
和合神 中輪水紅ばかし八重咲、葉に覆輪ありて一種の風情あり  
日出の雪 白地に紅ばかし中輪極細地咲にて二輪づ、香をなす故に此名  
銘花の中今日最も盆栽家の愛するものは東雲、峰の雪、七福神、日出の雪等にして田毎の月福包みの如きも人氣ありといふ  
花は十一月を開花期として初春に互りて、椿の如き實を結ぶ、培養法は別に困難なる點なし盆栽造

りは實生より三年目に接木し後また三年を経て花開く、地植も實生より六年の傍始めて花あり六月中に植替へを成り秋の末肥料を注ぐ、下肥最もよし而して仕立中は烈しき西日を厭ふにより蔭簷を蔽ひまた開花中は霜雪を防ぐの手當をなすべし目下漸く花期に迫り庭前の一枝紅白を競ふの時にあたり山茶園蘆葦にては獨得の銘花を陳列して意に縱覽せしめ居れば同好の士は菊に趨り紅葉に趨くの亭同園を訪ふて其丹雘を睹るべし。



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十一  
田

十一  
田



閱覽

十一  
田  
辺

明治三十六年

十一月上浣

春城山人